永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2015年 10月

「購いの計画（Ⅲ）」「再臨に関連した出来事」「もう一人の御使と大いなる叫び」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「贖いの計画 (Ⅲ) - 人間のなすべき分 -」 4

聖書の教え

朝のマナ

「再臨に関連した出来事」 9

われらの主よ、きたりませ

現代の真理

「もう一人の御使と大いなる叫び」 41

三重のメッセージ - もう一人の御使のメッセージ

力を得るための食事

「油あげの詰め焼き」 50

お話コーナー

「真の生きた家族」 52

教会

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：http://www.4angels.jp
メール：support@4angels.jp

発行日　2015 年 9 月 30 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamtimes on front cover;
HighRes on pages 8, 52

Printed in Japan

主の再臨に先だって伝えられる最後のメッセージ

安息日とその遵守は、……創世以来のものであり、神と天使たちとの認めるものであることが示された。地の基がすえられ、明けの星が相共に歌い、神の子たちがみな喜び呼ばわったその時、安息日の基礎が置かれたのである（創世記2:113、ヨブ記 38::6, 7 参照）。この制度がわれわれの崇敬を要求するのは当然である。それは、人間の権威によって命じられたものでも、人間の伝承によるものでもない。それは、日の老いたる者によって制定され、その永遠の言葉によって命じられたものである。（各時代の大争闘下巻 178, 179）

現在に至るまで、神の律法に関する知識は地上で保たれ、第四条の安息日は守られてきた。「不法の者」が、神の聖日を踏みにじりはしたが、その至上権時代にあっても、ひそかなところに隠れて、忠実な人々が安息日を尊んでいた。宗教改革以後、いつの時代においても、だれかが安息日を守り続けていた。……神の律法の不変性と、創造の安息日を聖く守るべきこととが、絶えずあかしされてきた。

これらの真理は、黙示録 14 章において「永遠の福音」と関連して示されているように、再臨の時のキリストの教会の特徴である。なぜなら、三重のメッセージが伝えられる結果として、「ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言われているからである。そして、このメッセージは、主の再臨に先だって伝えられる最後のものである。これが宣布されたあと、直ちに、人の子が地の収穫を刈るために栄光のうちに来られるのを、預言者は見たのである。

聖所と神の律法の不変性とについての光を受けた人々は、彼らが理解した真理の体系の美と調和を見て、喜びと驚きに満たされた。彼らは、非常に貴重なものに思われたその光を、すべてのキリスト者たちに伝えたいと願った。そして、それが喜んで迎えられるものと信じて疑わなかった。……

知恵の根源である神と個人的につながっている者だけが、聖書を理解し説明することができる。……

われわれは、正しいことを、それが正しいことであるがゆえに選び、結果は神にゆだねなければならない。世界の大改革は、原則と信仰と勇気の人々によって行なわれたのである。そのような人々によって、この時代の改革も推進されなければならない。（各時代の大争闘下巻 176 ～ 185）

聖書の教えX

7章　贖いの計画（Ⅲ）

C. 人間のなすべき分

罪人のなすべき分は、神の召しに答えて悔い改めに至ることです（マタイ 4:17; 黙示録 3:20; ヘブル 3:15（cf. マタイ 22:14）；マルコ 2:17; 使徒行伝 2:37, 38）。罪人を悔い改めへ導くのは神であり、彼らは召しが自分たちに訪れたときに聖霊の感化に従います（使徒行伝 5:31; ローマ 2:4）。彼らは自分の罪を神に告白し、キリストを自分の個人的な救い主として受け入れ、信仰によってキリストが彼らのために（彼らの義認のために）して下さったことと、キリストが聖霊の働きを通して彼らのうちに（彼らの聖化のために）なしたいと願っておられることを受け入れます（ヨハネ第一 1:9; 使徒行伝 16:31; ヘブル 12:2; エペソ 4:22–24）。彼らは自分自身の力のうちにではなく、上より受ける力、すなわち神の恵みのうちに、神の戒めに従うことによって、このお方のみ旨を行います（マタイ 5:19, 20; 7:21; 19:17; ペテロ第二 1:3–11）。自分自身の救いを見ながら、彼らはバプテスマを受け、見張り、祈り、瞑想し、聖書を研究し、自分の意志をあらわされた神のみ旨に明け渡し（ヨハネ 7:17; ヤコブ 4:7）、そして他の人の救いのために働きます（マルコ 16:16; 13:33–37; テモテ第二 2:15; マタイ 28:19, 20; テモテ第一 4:12–16; コロサイ 1:28, 29）。彼らはキリストのみ名のうちに、このお方の恵み（力）によって、悪魔に抵抗します（ピリピ 2:12, 13; ヤコブ 4:7, 8; ペテロ第一 5:6–9）。彼らは勝利者になるために奮闘します（ヨハネ第一 3:6; ルカ 13:23, 24; 黙示録 21:7. 教会への証 4 巻 32; 患難から栄光へ下巻 176, 177 参照）。

御父へのわたしたちの祈りは、わたしたちが御子と聖霊を通して御父と正しい関係をもっているという条件に基づいて聞かれ、答えられます（ヨハネ 14:13; 15:14–16; 16:23; ヨハネ第一 3:21–24; 5:14, 15; 黙示録 5:8; 8:4）。

外面的な現れ

「内なる義は外なる義によって証明される。内なる義を持つ者は薄情や無情な

者となることなく、日ごとにキリストのみ像に成長し、力より力に進みます。真理によって清められている者は自我を克服し、キリストの足跡にしたがい、恵みはついに栄光のうちに見失われる。私たちが義とされるのはキリストによって着せられる義によってであり、私たちが聖化されるのは、キリストを通して与えられる義によるものである。前者は天国にはいる私たちの肩書き、後者は天国にはいる私たちの資格である。」(青年への使命 22)

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」(キリストの実物教訓 47)

意志の力

「キリストは、人性をおとりになったとき愛のきずなで人類をご自身に結びつけて下さった。しかしこのきずなは、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔はつねにこのきずなを断ち切ろうとし、わたしたちが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってくる。そこでわたしたちは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要がある。どちらを選ぶのもつねに自由である。キリストから目を離さないかぎりキリストはわたしたちを守ってくださる。イエスをながめていればわたしたちは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちよりわたしたちを奪うことはできない。つねにイエスをながめることによってわたしたちは『主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく』ようになるのである(コリント第二 3:18)。」(キリストへの道 97, 98)

「純粋な宗教は意志と関係がある。意志は人間の性質にある支配力で、他のすべての機能をその支配下に置く。意志は、好みや傾向ではなく、神への従順か、不従順かを選ぶよう人の子のうちに働く決断力である。」(教会への証 5 巻 513)

完全な回復

「すべての生けるクリスチャンは、神聖な生涯を日ごとに前進する。彼が完全へ向かって前進するとき、彼は毎日神への改心を経験する。そしてこの改心はクリスチャン品性の完全、すなわち不死の仕上げの一触を受ける完全な準備ができるまで完成しない。」(教会への証 2 巻 505)

「罪のために、人間だけでなく、地も悪者の支配下に陥った。そして、地も贖罪の計画によって、回復されなければならなかった。」(人類のあけぼの上巻 59)

「自らを天使たちの社会にふさわしいものとするためにわたしたちのなすべき働きがある。わたしたちは罪の汚れなく、イエスのようにならなければならない。このお方こそ、わたしたちがなるようにと要求されているすべてである。このお方は子供のために、青年のために、成人のために完全な模範であられた。わたしたちはこの模範をもっと厳密に研究しなければならない。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1885 年 11 月 17 日)

D. クリスチャンの完全

贖われた者は、神のみ座の前に傷なく立つようになります (詩篇 37:37; マタイ 5:48; ルカ 6:40; ピリピ 3:15; ペテロ第一 5:10; ユダ 24)。恩恵期間が閉じる前に神の民はみな、すべての汚れから清められます。キリストが来られるとき、キリストは彼らを傷のない者にして下さるのではなく、そうであることを「見られる」のです (黙示録 7:13, 14; 14:5; コリント第一 1:7, 8; テサロニケ第一 5:23; ペテロ第二 3:12, 14; ヨハネ第一 3:2, 3)。

「わたしたちが神のみ前に恩寵を得て立つのは、自分たちに何か功績があるからではなく、『主われらの義』を信じるわたしたちの信仰のゆえである。イエスは聖所の至聖所の中で、今わたしたちのために神のみ前に出ておられる。そこでこのお方はご自分の民を一瞬一瞬、ご自分のうちに完全なものとして提示することをおやめにならない。しかし、わたしたちがこのように御父の前に提示されているからといって、このお方の憐れみにつけ込み、不注意や無関心になったり自己放縦にふけったりしてもよいと思ってはならない。キリストは罪に仕えるお方ではない。わたしたちは信仰によってこのお方のうちに宿っているときにのみ、このお方のうちに完全であり、愛されているお方のうちに受け入れられるのである。わたしたち自身のよいわざを通しては、決して完全を手に入れることはできない。イエスを信仰によって見る魂は、自分自身の義を拒絶する。彼は自分自身を不完全なものとし、自分の悔い改めを不十分なもの、自分の最も強い信仰を弱々しいもの、自分のもっとも高価な犠牲を貧弱なものとして見る。そして彼はへりくだりのうちに十字架の下に沈むのである。しかし、彼に神のみ言葉の託宣より声が語りかけ

る。彼は驚いて次のメッセージを聞く。『あなたはこのお方のうちに完全である』。今、彼の魂のうちにすべては解決するのである。」(信仰と行い 107, 108)

E. 二度目のチャンスはない

聖書は憐れみの戸―罪人が救いを得る機会が与えられる時―が永遠に開いているわけではないことを教えています。恩恵期間は主イエス・キリストが戻られる直前に終わります。恩恵期間が閉じた後に、二度目のチャンスはないのです(ルカ 13:23–27; マタイ 7:22, 23; 25:10–13; イザヤ 55:6; コリント第二 6:1, 2; エレミヤ 8:20; 黙示録 22:11)。

「神が不従順のうちに人を救い、その後彼らに二度目の恩恵期間を与えて、この世の生涯におけるテストを受けさせても、彼らは将来の生涯においてこのお方の権威を認めることはない。この世においてキリストに不忠実である人々は、来たるべき世においてもこのお方に対して不忠実であり、天で二度目の反逆を生じさせるようになる。人の前にはアダムの不従順と堕落の歴史があり、そのゆえに彼らは神の律法をあえて犯すことに対して警告を受けるべきである。イエス・キリストはすべての人が自分の召しと選びを確かなものとするために死なれたのである。しかしこの福音の時代における義の標準は、アダムの時代においても少しも低くなっていない。そして天は従順の報いとなるのである。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 9 月 28 日)

MEMO

われらの主よ、きたりませ

Maranatha

10 月「再臨に関連した出来事」

不義なる者の特別復活

「見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかり、アァメン。」(黙示録 1:7)

「彼を刺しとおした者たち」(黙示録 1:7)、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民とに対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまとわれたこのお方をながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉れを見るために、よみがえらせられる。(各時代の大争闘下巻 415)

〔このお方の裁判で〕カヤパは、右手を天に向かってあげ、厳粛な宣誓の形式で、イエスに問いかけた、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」。……

イエスが、「あなたの言うとおりである」と答えられたとき、だれもがみな耳をそばだてて、目をイエスのお顔にじっとそそいだ。そしてイエスが「しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」とつけ加えられたとき、その青ざめた顔を天の光が照らしたようにみえた。

一瞬間、キリストの人としての姿に神性がひらめいた。大祭司は救い主の射るような眼光の前にたじろいだ。……一瞬間彼は、自分が永遠のさばき主の前に立っていて、すべてのことをごらんになる神の御目が自分の魂を見抜き、死人と共に葬ってしまったと思っていた秘密が明るみに出されているような気がした。

その光景は祭司の視界から消えた。……、自分の衣を裂いて、……この囚人を冒涜の罪に定めるようにと要求した。「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があろう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」と、彼は言った。そこで彼らはみなイエスを有罪と断定した。(各時代の希望下巻 200-202)

こうしてユダヤの指導者たちは、ついにこのような道を選んだ。彼らの決定は、いかなる人も開くことのできない書にしるされた。ヨハネはこの書がみ座にいますかたの手にあるのを見た。この決断は、ユダ族のししによってこの書が開封される日に、彼らの前に明らかにされ、彼らはその報復を受けるのである。(キリストの実物教訓 272)

キリストが暴徒に取り囲まれた囚人としてではなく、再臨される時、彼らはこのお方を見る。彼らはこのお方を天の王として見るのである。……その時祭司や指導者たちは、裁判所での光景をはっきりと思い出す。すべての出来事が炎の文字で書かれたかのように彼らの前に現れる。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1900 年 1 月 17 日)

天体は焼けてくずれる

「しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。」(ペテロ第二 3:10)

キリスト来臨の直前、主の日に、神はご自分の怒りのうちに天から稲妻を送られ、それが地上における火と一つになる。山々は炉のように燃え、恐ろしい溶岩の流れがあふれ出て、庭や畑、村々町々を破壊する。また、溶けた鉱石、岩、焼けた泥を川に注ぎ込むと、それらはヤカンの湯のように沸騰して、言語に絶する激しさで、大きな岩を降らせ、地に砕けた破片を撒き散らす。すべての川は干上がる。地は激しく震え、至る所でものすごい噴火と地震が起こる。地上に住むよこしまな住民が滅ぼされてしまうまで、神は彼らに災いを送られる。(霊的賜物 3 巻 82, 83)

地は酔いどれのようによろめき、小屋のように動かされる。自然界の要素は炎に包まれ、天は巻物が巻かれるように消えていく。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]5 巻 1110)

地殻は地の底深く隠されていた要素の爆発によって引き裂かれる。束縛から脱したこれらの要素は使用人から搾取した財産を守ることにより、長年の間富を増し加えていた者たちの宝を一掃する。(原稿 24,1891 年)

大火が目前に迫っている。この時、これらの生涯の浪費された労力がみな一昼夜で一掃されるのである。(教会への証 4 巻 49)

人の命の大破壊が……おこる。しかし大洪水の日に、神がノアのために用意された箱舟の中で彼が守られたように、この破壊と災いの日に、神はご自分を信じる者の避け所となられる。詩篇記者を通して神は「あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない」「それは主が悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ……」そのときわたしたちは主を自分の保証人、また防御としないのだろうか。(手紙 258、1907 年)

キリストがご自分を愛する者のために用意しに行かれた住居のために、わたしたちは準備しているべきである。そこには地上の争いからの休息がある。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 10 月 19 日)

七つめの災いの生々しい描写

「あなたは……ひょうの倉を見たことがあるか。 これらは悩みの時のため、……わたしがたくわえて置いたものだ。」(ヨブ 38:22,23)

バイロン・ベルデン、サラ・ベルデン、メイ・レイシー姉妹は〔オーストラリアの〕プロスペクスにおける会合に、わたしと同行した。〔会合のあった〕家を出たとき、わたしたちは嵐が……非常な勢いで近づいているのに気が付いたので、馬をできるだけ速く走らせた。わたしたちが家の近くまで来た時に、激しい強風が襲ってきた。にわとりの卵ほどもある雹のかたまりが降り始めた。……雹が恐ろしい力で馬にあたるので、〔それらは〕若い馬をおびえさせてしまった。

「バイロン、すぐ外に出て……馬のところへ行って、話しかけてください。自分たちを打ちたたいているのがあなたではないことを、彼らに知らせてやってください。」とわたしは言った。彼はこれを聞いて、すぐに馬車から飛び降りた。「メイ・レイシーとサラ、出ましょう。」彼らが降りた後、わたしも続いた。メイとサラはわたしが降りるのを助けてくれた。……風がものすごい勢いで吹いていたので、帽子は飛んで行き、クッションは馬車から吹き飛ばされた。重い馬車のクッションや傘、ひざ掛けが野原に吹きさらわれ、あらゆる方向に飛んでいった。……

何という光景であろうか、ベルデン姉妹とメイ・レイシー、そしてわたしは帽子を被らないまま家へとたどり着いた。……バイロンはあわれな、恐怖に打ち震えた新しい馬と一緒だった。……わたしたちは神の助けを求め、ただ心をこのお方に向けるばかりであった。……

これはわたしが嵐の中で馬車に乗っていた体験の中で、もっとも厳しいものであった。……神のさばきが世界に降り注ぐ日のこと、暗黒と恐ろしい暗闇が毛織の荒布のように天を覆う日のことをわたしは思った。……主の力強いみ声が天使たちに向かって、「さあ行って、神の激しい怒りの鉢を地に傾けよ」と命じられるその時に、何が行われなければならないのかをわたしは思った。……

黙示録 6 章と 7 章は非常に意味の深い章である。神の裁きの恐ろしさが記されている。7 人の天使は命令を受けるために神のみ前に立った。ラッパが 7 本彼らに与えられた。主は地の住民を罰するために出て行こうとしておられる。……

神の災いが地に下るとき、悪人たちの上に一タラントの重さの雹が降る。(原稿 59,1895 年)

地はその造り主から逃れる

「それゆえ、万軍の主の憤りにより、その激しい怒りの日に、(わたしは) 天は(天を)震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。 彼らは追われた、かもしかのように、あるいは集める者のない羊のようにな」る。(イザヤ 13:13, 14)

重苦しい雲がなお空をおおっている。しかし、時おり太陽がすきまから現われ、それが主の報復の目のようである。恐ろしいいなずまが天からひらめき、地球を一面の炎で包むように見える。恐ろしい雷鳴を圧して、神秘的なおそるべき声が、悪人たちの運命を宣告する。この時語られる言葉は、すべての者に理解されるわけではないが、偽教師たちには、それがはっきり理解される。ついさっきまでは、向こう見ずで、高慢で、反抗的で、神の戒めを守る民を残酷にあしらって勝ち誇っていた者たちが、今はもうあわてふためき、恐れおののいている。彼らの泣き叫ぶ声は、自然界の物音を越えて聞こえてくる。悪鬼たちは、キリストの神性を認めて、キリストの力の前に震えあがり、一方人々は、あわれみをこい求めて、目も当てられないような恐怖のうちにはいつくばる。……

雲の切れ目から、暗黒とは対照的に、四倍も輝きを増した一つの星が光る。この星は、忠実な者には、望みと喜びとを語るが、神の律法を犯した者たちには、きびしさと怒りとを語る。キリストのためにすべてを犠牲にした者たちは、主の仮屋の奥に隠されているかのように、今は安全である。すでに彼らは試みられ、世界と真理を軽べつする人々との前で、自分たちのために死なれたおかたに対する忠誠心を証明したのである。死に直面してもなお忠誠心を固く保ち続けた者たちの上に、驚くべき変化が起きた。彼らは、悪鬼と化した人々の暗黒と恐怖の圧制から、突然救い出された。さっきまで青ざめ、不安に閉ざされて、やつれはてていた彼らの顔が、今は驚嘆と信仰と愛に輝いている。彼らの声は、勝利の歌となってあがる。「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも、われらは恐れない」(詩篇４６：1-3)。(各時代の大争闘下巻 415-417)

神の律法が天に現れる

「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである。」(詩篇50:6)

雲は退き、両側の暗い怒ったような大空とは対照的に、言うに言われぬ栄光に輝く星空が見えてくる。天の都の栄光が、開かれた門から流れ出る。(各時代の大争闘下巻417)

神の律法が書かれている二枚の石の板を納めていた契約の箱が、宮の中に見える。この石の板は、隠れた場所から持ち出され、それには神の指で刻まれた十戒が見える。今は契約の箱の中に納められているこの石の板は、真理に対して確信を与えるあかしであり、神の律法という拘束力のある要求である。(SDAﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ[E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7巻972)

神聖を汚す思いや心は、自分たちにはエホバの神の時と律法を変える力が充分にあると考える。しかし天の保管場所、すなわち天の契約の箱には、二枚の石の板に書かれた元々の戒めが安置されている。どのような地上の有力者も、恵みの座の下にあるこの聖なる隠れた場所から、これらの板を引き出す力はないのである。(同上)

そのとき、折りたたんだ二枚の石の板を持った手が、空中に現われる。「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである」と預言者は言っている(詩篇50:6)。シナイ山から雷鳴と炎の中で、人生の指針として宣言された神の義であるあの聖なる律法が、今やさばきの規準として人々に示される。その手が石の板を開くと、火のペンでしるされたかと思われる十誡の言葉が見える。その言葉は、はっきり書かれていて、だれでも読むことができる。記憶が呼びさまされ、すべての人の心から迷信と異端の暗黒が払いのけられて、簡単で理解しやすく、権威に満ちた神の十の言葉が、地上の全住民の前に示される。

神の聖なる要求をふみにじってきた者たちの恐怖と失望とは、描写することができない。……

神の律法の反対者たちは、牧師からいちばん小さい者にいたるまで、真理と義務について新たな考えを抱く。彼らは第四条の安息日が生ける神の印であることを知るが、しかしもう遅い。(各時代の大争闘下巻417, 418)

キリストの来臨の日時が知らされる

「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも……知らない、ただ父だけが知っておられる。」(マタイ 24:36)

天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。どんな雷鳴も及ばぬとどろきをもって、神のみ言葉が地上になりひびく。(各時代の大争闘下巻 418)

神は一節ずつ区切りながら、一語一語天地にひびきわたるような声でお語りになった。神の民は、目を天に向けて、エホバの口から出ることばが、すさまじい雷鳴のひびきのように天地にひびき渡るのを聞いた。まことに荘厳そのものだった。一節の切れ目ごとに聖徒たちは、「ハレルヤ、栄光あれ」と叫んだ。(初代文集 461)

14 万 4 千の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った。(同上 64)

神のイスラエルは、耳を傾け、目を上方に注いで立っている。彼らの顔は神の栄光に照らされて、シナイ山から帰ってきたときのモーセの顔のように輝いている。悪人たちは、彼らを見つめることができない。神の安息日をきよく守ることによって神をあがめてきた者たちに、祝福が宣言されると、勝利の力強い叫びが起こる。(各時代の大争闘下巻 418, 419)

それからヨベルの年が始まり、地は休まねばならなかった。(初代文集 95)

彼らの上には栄光の光が輝いていた。その時彼らは、なんと美しく見えたことだろう。心労と苦労のあとはすべて消え、すべての者の顔に健康と美がみなぎっていた。彼らの回りの敵や異教徒は、死人のように横たわっていた。彼らは、救われた聖なる人々の上に輝いた光に耐えられなかったのである。イエスが天の雲にのって来られ、忠実で試みを経た一団の人々がまたたく間に一瞬にして栄光から栄光へと変えられるまで、この光と栄光とは、彼らの上にとどまった。(初代文集 442)

そしてわたしはイエスが立っておられる燃え立っているような雲が近づくのを見た。そのときイエスは……東へ向かってくる雲に乗っておられた。その雲は地上にいる聖徒たちに現れたが、人の子のしるしである小さな黒雲であった。雲が至聖所から東へと向かって行く間に、何日もかかったのであるが、サタンの会衆は聖徒の足元で礼拝した。(広く散らされた小さな残りの群れに 1846 年 4 月 6 日)

黄金の朝のひらめき

「ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。」(マタイ 24:27)

全世界が暗黒に閉ざされているときに、聖徒たちのすべての住居には光がある。彼らは、キリストの再臨の最初の光を認める。(国と指導者下巻 320)

まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現われる。それは、救い主を囲んでいる雲で、遠くからは、暗黒に包まれているように見える。神の民は、これが人の子のしるしであることを知っている。彼らは、厳粛な沈黙のうちに、その雲が地上に近づくのを見つめる。それは次第に明るさと輝かしさを増し、ついには大きな白い雲となって、下のほうには焼き尽くす火のような栄光が輝き、上のほうには契約のにじがかかっている。イエスは、偉大な勝利者としておいでになる。今度は、恥辱と苦悩の苦い杯を飲む「悲しみの人」ではなくて、天地の勝利者として、生きている者と死んだ者とをさばくためにこられる。「忠実で真実な者」「義によってさばき、また戦うかたである。」そして「天の軍勢が」彼に従う(黙示録 19:11,14)。数えることができないほどの聖天使の群れが、天の聖歌を歌いながら付き従う。大空は、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの、輝く天使たちで満たされたように見える。この光景は、人間のどんな筆によっても描くことができない。その輝かしさは、どんな人間の頭でも十分に想像することはできない。「その栄光は天をおおい、そのさんびは地に満ちた。その輝きは光のようであ」る(ハバクク書 3:3, 4)。生きている雲が、さらに近づくと、すべての目は、いのちの君をながめる。いまはその聖なる頭を傷つけるいばらの冠はなく、その聖なる額には栄光の冠がある。そのみ顔は、真昼の太陽よりもまぶしく輝く。「その着物にも、そのももにも、『王の王、主の主』という名がしるされていた」(黙示録 19:16)。(各時代の大争闘下巻 419)

頭を上げ自分たちを照らす義の太陽の輝く光を受けて、自分たちのあがないが近づいている喜びに満たされつつ、彼ら〔生きている聖徒たち〕は、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ、彼はわたしたちを救われる」と言いながら、花婿を迎えに出る。(高い召し 367)

キリストの再臨

「われらの神は来て、もだされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。 神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばわれる」(詩篇 50:3, 4)

やがて、われわれの目は、東のほうにひきつけられた。それは、人間の手の半分ぐらいの大きさの、小さい黒雲が現われたからである。われわれはみな、これが人の子のしるしであることを知っていた。われわれはみな、その雲が、近づくにつれてますます明るく輝き、さらに輝きを増してついに大きな白い雲になるのを、厳粛な思いで黙って見ていた。雲の下のほうは火のように見えた。雲の上にはにじがあった。その周りでは、無数の天使たちが、この上なく美しい歌を歌っていた。雲の上には人の子が座しておられた。(初代文集 64, 65)

その雲は、空の遠くに現れたときには初め小さく見えた。天使は、それが人の子のしるしだと告げた。その雲が地上に近づくと、わたしたちは、勝利を収めるためにこられるイエスの、欠けるところのない栄光と権威をまのあたりに見ることができた。(同上 461, 462)

彼の髪の毛は白く波打って肩にかかっていた。彼の頭には、多くの冠があった。彼の足は火のように見えた。彼の右手には鋭いかまがあり、左手には、銀のラッパがあった。彼の目は火の炎のようで、彼の民を心の奥底までさぐった。そのとき、すべての者の顔は青ざめた。神に拒否された人々の顔は絶望で真っ青になった。そのとき、われわれは、みな、「だれが、その前に立つことができようか。わたしの着物には、しみがついていないだろうか」と叫んだ。すると天使たちは、歌うのをやめ、恐ろしい沈黙が、しばらく続いた。そして、イエスは、「手が清く、心のいさぎよい者が、その前に立つことができる。わたしの恵みは、あなたに対して十分である」と言われた。これを聞いてわれわれの顔は輝き、すべての者の心は、喜びにあふれた。天使たちは、ふたたび高らかに音楽をかなでて、歌いはじめた。雲はますます地上に近づいた。(同上 65)

地はその前に揺れ、天は巻き物をまくように去っていき、山々と島々はその所を離れた。「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。(同上 462)

地の洞窟やほら穴で

「主が立って地を脅かされるとき、人々は岩のほら穴にはいり、また地の穴にはいって、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。」(イザヤ 2:19)

隠れていた人々は、エホバの神の律法に対する人間の敵意のゆえに追い散らされているのである。この人々は地上のあらゆる権力に虐(しいた) げられている。彼らはエホバの神の律法に忠実で、従順なので、敵の暴力によって、洞窟やほら穴に追い散らされているのである。しかし神の民には解放がもたらされる。神は民の敵に対し、報復の神として、ご自身を現されるのである。

神の民にとって秘密の隠れ家であった洞窟や地のほら穴から、真実で忠実な神のあかし人として、彼らは呼び出される。

自分たちの反抗を押し通していた人々は、黙示録 6:15-17 に示されている描写を成就させる。このほら穴や洞窟の中で、彼らは悪人たちに対するあかしとして、手紙や出版物に書かれている真理そのものを見つける。羊を誤った道に導く羊飼いは、次のように責任を問われる。「真理の光をあなたは勝手に作った。神の律法は奴隷のくびきであって、廃止されたとわたしたちに語ったのはあなただった。セブンスデー・アドベンチストたちが真理を持っているとわたしが悟ったとき、偽りの教理を言い表したのはあなたであった。わたしたちの魂の血はあなたの聖職者としての衣服につく。……あなたは今、わたしの魂のために身代金を支払うつもりか。・・・・・ あなたは聖書をゆがめ、従っていればわたしたちを救ったはずの真理を偽りに変えてしまったが、それに聞き従ったわたしたちは、いったいどうすればよいのか」と。

神の安息日を踏みにじって、その記念日を台無しにするように人々を教育し、また訓練してきた者、そして神の牧場で牧草を自分の足で踏みつける者に報復するため、キリストが来られる時、嘆きはなくなる。偽の羊飼いを信頼していた者は自分たちを探し求める神のみ言葉を持っていた。そして、真理を持っていながら、それが克己と十字架を含むがゆえに、光から離れた全ての者に、神が判決を下されることに彼らは気づく。岩も山も、御座にいます方の憤りと小羊の怒りから彼らをさえぎることはできない。(手紙 86, 1900 年)

再臨の時のキリストの外観

「しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。」(ピリピ 3:20,21)

キリストは人の姿をして天へのぼられた。弟子たちは雲がイエスを受けるのを目に見た。彼らと共にあゆみ、語り、祈られたおかた、彼らと共にパンをさかれたおかた、湖の上で彼らの舟にいっしょにおられたおかた、その日彼らと共にオリブ山の登り道を苦労されたおかた、その同じイエスが天父と同じみ座につくためにいま行っておしまいになったのである。ところが天使たちは、天にのぼられるのを弟子たちが見たそのおかたが、のぼって行かれたのと同じにふたたびこられることを保証したのであった。(各時代の希望下巻 382, 383)

キリストの人性としての栄光は、地上におられた時には現れなかった。……キリストが栄光と勝利に包まれ、気高い礼服を身にまとって、天から下って来られる時、その同じ人性に栄光が現れる。(天国で 358)

キリストご自身の栄光と、み父の栄光、そして聖天使たちの栄光のうちに来られる。千々、万々の天使たちと、勝利した、麗しい神の子らが、比べるもののない素晴らしさと栄光を伴って、その道をキリストに付き従う。いばらの冠を被られた頭に、主は冠の中の冠、栄光の冠を被っておられる。古い紫色の衣の代わりに「どんな布さらしでも、それほどに白くすることができないくらい」(マルコ 9:3) の白い衣を着ておられる。そしてその着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名が記されている (黙示録 19:16)。(わたしたちの高い召し 367)

全天には、天使がいなくなる。彼がオリブ山から昇天されたときに、ガリラヤの人々が天を仰いだように、彼を待ち望む聖徒たちは天を仰ぐのである。その時、聖なる人々、すなわち、柔和な模範に完全に従った人々だけが、彼を仰ぎ見て、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と、熱狂的な喜びに満たされて叫ぶのである。そして、彼らは、「終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる」。そのラッパによって、眠っている聖徒たちは呼び醒まされ、土の床から輝かしい不死をまとって出て来て、「勝利した！ 死と墓とに勝利した！ 」と叫ぶのである。(初代文集 208, 209)

再臨の時のさばき

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。」(テモテ第二 4:1)

審判は全天の出席のもとに行われる。なぜならこの審判で神の統治の正しいことが立証され、神の律法は「聖であって、正しく、かつ善なるもの」として立つからである。それからすべてのさばきが決定し、判決が下る。その時罪は魅力的には見えないで、すべての者に非常に忌まわしいものとして映る。(神のむすこ娘たち 361)

人間の言葉は、天の雲に乗ってこられる人の子の再臨の光景を表現することはできない。主はご自身の栄光をたずさえて来られるのである。永遠の昔から着ておられた光の衣を着て、来られるのである。天使たちが随行する。万々の天使が主の来られる道中、キリストに付き従うのである。トランペットの音が聞こえ、眠っている死者を墓から呼び出す。キリストの声が墓を突き通し、死者の耳を貫く。「そして墓の中にいるすべての者は……出てくる。」

そして、すべての国民をその前に集めて」人間のために死なれたその方が、最後の日にその人を裁かれる。なぜならみ父は「さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。……そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった」。キリストを拒んだ者が、自分の罪によって刺し通した方を見上げる時、その日は何という日になることだろう。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1899 年 9 月 5 日)

キリスト再臨のとき、すべての人の心に罪の自覚がもたらされる。地上のつまらない事、利己的な関心や世的な名誉を求めてキリストから離れ去った者は、主の来臨の日に自分の間違いに気づく。この人々は「彼のゆえに胸を打って嘆く」「地上の諸族」として、黙示録記者が記している者である。……

「彼を刺しとおした者たち」この言葉は、キリストがカルバリーの十字架にかけられたとき、彼を刺し通した人々だけではなく、悪口を言ったり、悪い行いをしたりすることによって、今日キリストを刺し通している者にも当てはまる。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1903 年 1 月 28 日)

キリストを刺し通した者

「イエスは言われた、『わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう』。」(マルコ 14:62)

ユダヤの指導者たちがキリストの栄光を見つめる時、人性という外観に覆われた人の子の記憶が彼らの記憶によみがえる。彼らは、自分たちがキリストをどのように取り扱ったか、どのように拒んだか、そして大背教者の側についたかを思い出す。キリストの生涯の光景がはっきりと彼らの前に示される。キリストのされたすべてのこと、仰せになったすべての言葉、自分たちを罪の汚れから救うために、天から降りてこられたへりくだりなどが、罪の宣告の中で彼らに示される。

彼らは、ロバに乗ってエルサレムに入ってこられるキリストを見つめる。そしてご自分のメッセージを受け入れない強情な町のために悲しんで涙を流されるの見る。招き、懇願、優しい思いやりの声が聞こえていたのだが、その声が再び自分たちの耳に聞こえてくるように思える。ゲッセマネの園での光景が目の前に浮かび、「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしからとりのけてください」というキリストの驚くべき祈りを聞く。

再び、彼らは「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」と言うピラトの声を聞く。バラバがキリストの側に立って、自分たちが一人を無罪にする権利を持っていた時の宮廷での恥ずべき光景を見る。彼らは、再び「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか、バラバか、それともキリストといわれるイエスか」というピラトの言葉を聞く。彼らは「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」という返事を聞く。「それではイエスは、どうしたら良いか」というピラトの問いに「十字架につけよ」という答えが返ってくる。

彼らは再び十字架という屈辱を負われる、いけにえであられる方を見る。「もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」「他人を救ったが、自分自身を救うことができない」のだと、勝ち誇って、大声でののしり叫ぶのを聞く。

今彼らは、ゲッセマネの園でも裁判の場でも、カルバリーの十字架の上でもないところにおられるキリストをながめる。屈辱のしるしは消え去っている神のみ顔、すなわち自分たちがつばを吐きかけ、祭司や、支配者たちが手の平で打ちたたいたそのみ顔を、彼らは見上げる。今真理はことごとく、まざまざと彼らに現される。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1899 年 9 月 5 日)

互いに殺しあう悪人たち

「主なる神は言われる、わたしはゴグに対し、すべての恐れを呼びよせる。すべての人のつるぎは、その兄弟に向けられる。」(エゼキエル 38:21)

悪人たちは、無念の思いに満たされる。それは、彼らが神と同胞とを無視した罪深さのためではなく、神が彼らに勝利されたためである。彼らは、結果がこうした状態であることを悲しむ、しかし、彼らは、その罪悪を悔いるのではない。彼らは、できれば勝利を収めようとして、ありとあらゆる手段を講じるのである。……

牧師たちと人々は、自分たちが神との正しい関係を持ってこなかったことを悟る。彼らは、自分たちが、すべて公正で義である律法の創始者に反逆してきたことを知る。神の戒めを破棄したことが、無数の罪悪、不和、憎悪、不正の原因となり、ついに地上は一大戦場、腐敗の巣くつとなった。これが、真理を拒み、誤りを信じることを選んだ者の目に写る光景である。神に従わず、忠誠を保たなかった人々が、永遠に失ったもの、すなわち永遠の生命に対して感じる渇望は、言葉では表現することができない。世からその才能と雄弁をもてはやされて崇拝された人々は、今、そうしたものの真相を見る。彼らは、罪によって何を失ったかを悟る。そして彼らは、自分たちが軽べつし、あざ笑っていた忠実な人々の足もとにひれ伏して、彼らが神に愛されていたことを認める。人々は、今まで自分たちが欺かれていたことを知る。彼らは、破滅に陥ったことを互いに責め合う。しかし彼らはみな一致して、最も激しい非難を牧師たちに浴びせる。不忠実な牧師たちは、耳ざわりのよいことを言ってきた。彼らは、聴衆に、神の律法を無視させ、律法を聖く守る人々を迫害させた。今、これらの教師たちは、絶望して、自分たちの欺瞞行為を世の前に告白する。群衆は激しい怒りに燃える。「われわれは失われてしまった！われわれの滅びの原因はあなたがただ」と彼らは叫ぶ。そして彼らは、偽りの教師たちにつめ寄る。かつて彼らを最も賞賛していたその人々が、最も恐ろしいのろいの言葉を浴びせるのである。かつて彼らに栄冠を与えたその手が、彼らを滅ぼすためにあげられる。神の民を滅ぼすために用いられることになっていた剣が、今、その敵を滅ぼすために用いられる。至るところに、争闘と流血が起こる。(各時代の大争闘下巻 437-439)

小羊の怒り

「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。 そして、山と岩とにむかって言った、『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。』」(黙示録 6:15,16)

あざけり笑う声はやんだ。偽りのくちびるは沈黙させられた。「騒々しい声と血まみれの衣」で相戦う戦いの騒ぎ、武器の鳴り響く音は静まる (イザヤ 9:5 英語訳)。今聞こえてくるのは、祈りと嘆きと悲しみの声だけである。少し前まであざけり笑っていた者たちが、「御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」と叫ぶ。悪人たちは、自分たちが軽べつし拒否してきたおかたの顔を見るよりは、山山の岩石の下に葬られることを願う。

死者の耳にも通るそのみ声を、彼らは知っている。その優しい訴えのみ声は、どんなにたびたび、彼らに悔い改めを呼びかけたことだろう。そのみ声は、友人や兄弟、そして贖い主の、心を打つ訴えのうちに、幾度聞かれたことだろう。その恵みを拒否した者にとって、「あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。……あなたはどうして死んでよかろうか」と長い間訴えてきたみ声ほど非難に満ち、心を責めるものはない (エゼキエル 33:11)。ああ、むしろ、それが見知らぬ人の声であればよいだろうに。「わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、手を伸べたが、顧みる者はなく、かえって、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかった」とイエスは言われる (箴言 1:24, 25)。その声は、彼らが消し去ってしまいたいと思う記憶―警告をあざけり、招きを拒み、特権を軽んじた記憶―を呼び起こす。(各時代の大争闘下巻 420, 421)

だれでも真理を拒む者の一生には、いつかは、良心がめざめ、偽善的な生活をふりかえって苦しみ、魂がとりかえしのつかない後悔に悩まされる時がある。けれども、そうしたことは、「恐慌が、あらしのように……臨」み、「災が、つむじ風のように臨」むその日の激しい後悔とは、とうていくらべられない (箴言 1:27)。キリストとキリストの忠実な民とを殺そうとした人々は、今、その人たちの上に栄光が宿っているのを見る。(同上 423)

神はハルマゲドンに介入される

「叫びは地の果にまで響きわたる。主が国々と争い、すべての肉なる者をさばき、悪人をつるぎに渡すからであると、主は言われる』。」(エレミヤ 25:31)

大争闘は、六千年にわたって続いてきた。神のみ子と天使たちは、人類に警告し、啓発し、そして救いをもたらすために、悪魔の力と闘ってきた。今や、すべての者が決定を下した。すなわち、悪人は、神に反抗するサタンの戦いに、完全に加担した。神が、ふみにじられたご自分の律法の権威を擁護される時が来たのである。今や争闘は、サタンとの争闘だけでなく、人間との争闘ともなる。「主が国々と争い」「悪人をつるぎに渡すからである。」

「その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々」に、救いのしるしがつけられた。今や、エゼキエルの幻の中で、その手に滅ぼす武器を持った人々に命令が与えられたように、死の天使が出て行く。「老若男女をことごとく殺せ。しかし身にしるしのある者には触れるな。まずわたしの聖所から始めよ。」「そこで、彼らは宮の前にいた老人から始めた」と預言者は言っている (エゼキエル 9:1-6)。滅びの働きは、人人の霊的保護者と称してきた人々から始められる。偽りの夜回りがまず第一に倒れる。あわれんだり助けたりする者はない。老若男女がみな滅ぼされる。

「主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない」(イザヤ 26:21)。「エルサレムを攻撃したもろもろの民を、主は災をもって撃たれる。すなわち彼らはなお足で立っているうちに、その肉は腐れ、目はその穴の中で腐れ、舌はその口の中で腐れる。その日には、主は彼らを大いにあわてさせられるので、彼らはおのおのその隣り人を捕え、手をあげてその隣り人を攻める」(ゼカリヤ 14:12,13)。自分たち自身の激しい怒りによる争いと、神の、あわれみを混じえない怒りの恐るべき降下によって、地の悪しき住民たちは、聖職者も為政者も民衆も、金持ちも貧乏人も、地位の高い者も低い者も、倒れてしまう。「その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及ぶ。彼らは悲しまれず、集められず、また葬られずに、地のおもてに糞土となる」(エレミヤ 25:33)。(各時代の大争闘下巻 439, 440)

最後の戦いの時の勢力

「主は武器の倉を開いてその怒りの武器を取り出された。主なる万軍の神が、カルデヤびとの地に事を行われるからである。」(エレミヤ 50:25)

神はみこころのままに、「火よ、あられよ、雪よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ」と、自然の勢力を呼び集めて敵の力を打破される (詩篇 148:8)。異教のアモリ人が神の目的にさからったとき、神はみ手をくだして、イスラエルの敵の上に「天から‥‥大石を降ら」された。地上歴史の最後の場面で、「主は武器の倉を開いてその怒りの武器を取り出された」ときに、もっと大きな戦いが、起こるといわれている (エレミヤ 50:25)。「あなたは雪の倉にはいったことがあるか。ひょうの倉を見たことがあるか。これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、わたしがたくわえて置いたものだ」と、神はたずねておられる (ヨブ 38:22, 23)。

黙示録の記者は、「大きな声が聖所の中から‥‥『事はすでに成った』」と宣告するときに起こる破滅について書いている。彼は、「一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた」と言っている (黙示録 16:17, 21)。(人類のあけぼの下巻 136)

この地上歴史の最後の場面で、戦争が荒れ狂う。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 10 月 19 日)

悪の力は争闘を起こさないで、この争いをあきらめることはない。しかしハルマゲドンの戦いではみ摂理が働く。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 983)

主の軍勢の指揮官であられるお方がその戦いを指揮するために、天使たちの先頭に立たれる。(同上 982)

その着物に王の王、主の主という名が記されているお方が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗っている天の軍勢を導かれる。(同上)

イエスがふたたびこの地上にこられるとき、彼は「地ばかりでなく天をも震わ」れるのである。「地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く。」「もろもろの天は巻物のように巻かれ、」「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。」「しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである」(ヘブル 12:26、イザヤ 24:20、34:4、ペテロ第二 3:10、ヨエル 3:16)。(各時代の希望下巻 310)

あなたがたも用意をしていなさい

「だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」(マタイ 24:44)

今日、キリストが天の雲に乗って来られるとしたら、だれが……主にお目にかかる用意ができているであろうか。わたしたちはあるがままの状態で天の王国へ移されるのだと考えてみなさい。わたしたちは神の聖徒たちと一つになり、天の王の子ら、王族と調和して生きる用意ができているであろうか。あなたは神との和解をしているだろうか。……あなたは自分の周囲にいる人々、家庭や近所の人々を助け、神の戒めを守っていない人々と接触して助けようとしているだろうか。……日々の生活の中に溶け込んだ行いがなければ、信仰告白は価値のないものであるということを覚えていなさい。神はわたしたちが本当にご自分の律法を守っているかどうか知っておられる。神はまさにわたしたちが何をしているか、何を考え、口に出しているかを知っておられる。わたしたちは王なるお方にお目にかかる用意をしているのであろうか。主が力と大いなる栄光とをもって天の雲に乗って来られる時、あなたは「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と言うことができるであろうか (イザヤ 25:9)。こういうことのできる者に対して、キリストは「高く上ってきなさい。あなたはこの地上よりもわたしを愛してきた。あなたはわたしの意思を喜んで行ってきた。あなたは今聖なる都に入り、永遠という冠を受けることができる」と仰せになる。

もしわたしたちがあるがままの状態で天に移されるとしたら、何人が神にお目にかかることができるだろうか。わたしたちのうち何人が婚宴の礼服を身につけているであろうか。何人がしみやしわ、またそのたぐいのものをつけていないであろうか。……

今はわたしたちが心を清める時、すなわち、自分の品性という衣を小羊の血で清める時である。ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言っている (ヨハネ 1:29)。……わたしたちは自分の罪を取り除いていただかないのだろうか。……

兄弟姉妹方よ、永遠の命という冠を確実なものとするために熱心に働くよう、あなたがたに懇願する。その報いは戦い、努力する価値のあるものである。……わたしたちの競走では、だれでも永遠の命という冠を報いとして受けることができる。わたしはこの冠が欲しい。わたしは神の助けによってこの冠を手にするのである。わたしは真理を固く保つのである。そうすれば麗しい王にお目にかかれるからである。(天国で 356)

義の全体的な回復

「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であって、それを亡霊の国の上に降らされるからである。」(イザヤ 26:19)

王の王は、燃える炎に包まれて、雲に乗って降りて来られる。天は巻物が巻かれるように消えていき、地は、王の王の前に震え、すべての山と島とは、その場所から移されてしまう。……

地がよろめき、いなずまがひらめき、雷がとどろく真っただ中で、神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こす。イエスは義人たちの墓をごらんになり、それから両手を天のほうへ上げて、「目ざめよ、目ざめよ、目ざめよ。ちりの中に眠る者たちよ、起きよ」と呼ばれる。地の全面にわたって、死者はその声を聞き、聞く者は生きる。そして、全地に、あらゆる国民、部族、国語、民族からなる大群の足音が鳴り響く。「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」と叫びながら、彼らは死の獄屋から、不死の栄光をまとって現われる(コリント第一・15:55)。そして、生きていた聖徒たちとよみがえった聖徒たちとはともに声をあわせて、勝利の長い喜びの叫びをあげる。

どの人もみな、墓に入った時と同じ身長で墓から現われる。……しかし、どの人もみな、永遠の若さの新鮮さと活力にあふれてよみがえる。……一度罪に汚されてしまって美を失い、死ぬべき、朽ち果てるべきものとなった体が、完全な、美しい、不死のものとなる。すべての傷や醜さは、墓の中に残される。……

生きている義人たちは、「またたく間に、一瞬にして」変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちとともに、空中において主に会うために引き上げられる。天使たちは、「天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集める。」(各時代の大争闘下巻 420-425)

小さな子供たちが、自分たちのちりの床から不死をまとって出てくると、すぐに母親の腕の中へ翼をはって飛んで行く。(ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 2巻 260)

長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へと上っていく。(各時代の大争闘下巻 425)

眠っている聖徒たちの勝利

「このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。」(ヨハネ 5:28, 29)

生命の与え主が、初めの復活で代価を払って買われた者たちを、呼び出される。そして、最後のラッパが鳴り響いて、おびただしい大群が永遠の栄光のために出てくるその勝利の時まで、すべての眠っている聖徒たちは安全に守られ、神のその名によって知られている貴重な宝石として、保護される。生きている間に神の性質にあずかる者であったゆえに、彼らの内に住まわれた救い主の力によって、彼らは死から連れ出される。(神のむすこ娘たち 359)

キリストは「墓の中にいるすべての者が彼の声を聞いて、出てくる時が近づいている」と仰せになった。その声は死者の墓をすべて貫いて、再び響く。そしてイエスにあって眠るすべての聖徒は目覚めて、自分の牢獄を去る。その時わたしたちがキリストの義によって受けた品性の徳が、もっとも気高い真の偉大さにわたしたちを結びつける。(同上)

眠っている聖徒たちの勝利は復活の朝、輝かしいものとなるであろう。……生命の与え主が、墓から出てくるすべての者に、不死の冠を被せてくださる。(同上)

そこによみがえった群れが立つ。最後の思い出は死とその苦しみであった。彼らにあった最後の思いは墓所と墓石についてであった。しかし今彼らは、「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」と宣言する。……ここに彼らは立ち、不死という仕上げの一筆が加えられ、主にお会いするために空中へ上って行く。……かたわらには天使が列を作っている。……その時天使の聖歌隊が勝利の調べを奏でて、二列になった天使たちが讃美をし、贖われた群れが、以前は地上で讃美していたけれども、今はこの讃美に加わり、歌いつづける。ああ、なんという調べであろうか。そこには不調和の旋律は少しもない。すべての声が「ほふられた小羊こそは讃美を受けるにふさわしい」と宣言する。キリストはご自分の骨折りの結果を御覧になり、満足される。(同上)

復活の神秘

「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる。 わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、わたしは肉を離れて神を見るであろう。 しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」(ヨブ 19:25-27)

わたしたちの個人的な特徴は、墓に入った時と同じ体を構成する物質や素材ではないが、復活の時に保たれている。神の驚くべきみわざは人間にとっては神秘である。人の霊、すなわち品性は神のもとに返されるが、そこで保たれている。復活のとき、すべての人には自分自身の品性がある。神は定められた時に死者を呼び起こし、生命の息を再び吹き入れ、乾いた骨に生きよと命じられる。死者は生前と同じ姿になるが、病気やあらゆる欠陥はなくなっている。同じ個人的特徴を持った顔形をして、再び生きるので、友は友を見分ける。自然の中には、死の前に体を構成していたのと同じ物質を神が与え返されるということを示す神の法則はない。神は義なる死者に、ご自分にかなう体をお与えになるのである。

パウロは畑にまく麦の粒で、この主題を説明している。まいた種は朽ちるが、そこから新しい穀粒がでてくる。朽ちる麦の中にある、もともとの物質は二度とよみがえらないが、神はご自分にかなう体をそれにお与えになる。はるかに素晴らしい素材が人間の体を構成する。なぜなら新しい創造、新生だからである。生まれながらの体はまかれ、霊の体によみがえるのである。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]6 巻 1093)

彼 (信者) は、キリストが死なれたように、死ぬかもしれないが、救い主の命は彼のうちにある。彼の命はキリストと共に神のうちに隠れる。「わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」とイエスは言われた。信じる者たちが、現世でキリストと一つになり、永遠にわたって主と一つでいられるようにと主は偉大な準備をなさるのである。……

最後の日には主は彼らをご自身の一部としてよみがえらせてくださる。……キリストは、わたしたちがご自身と共に神にあずかる者となるために、わたしたちと一つになってくださった。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1901 年 6 月 18 日)

永遠の生命が今始まる

「そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。」(ヨハネ第一 5:11)

イエスの復活は、主にあって眠るすべての者の最終的な復活の型であった。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1878 年 9 月 26 日)

彼 (クリスチャン) は死ぬかもしれない。しかしキリストの命は彼のうちにある。そして、復活のその時に彼は新しい命へとよみがえるのである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1901 年 10 月 1 日)

「この言 (キリスト) に命があった。そしてこの命は人の光であった。」ここに記されている命は肉体上のことではなく、不死、すなわち、まったく神の持ち物である命のことである。神と共にあり、神であった言にこの命があった。肉体上の命は各個人が受けるものである。これは永遠のものでも、不死のものでもない。なぜなら、生命の与え主であられる神が再びこれを取り戻されるからである。人は自分の生命を制することはない。しかし、キリストの命はもらった命ではない。だれもキリストからこの命を取り去ることはできない。「わたしが自分からそれを捨てるのである」と主は言われた。キリストの内にある命は、もともと本来の根本的な命である。この命は人に生来備わっているものではない。人はキリストを通してのみ、これを持つことができるのである。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 4 月 8 日)

キリストは人性を取っておられる間、全能の神に、ご自分の命を依存しておられた。主はご自身の人性のうちに、神の神性をしっかりとつかんでおられた。そして人類家族の一人一人もこうする特権があるのである。……

もしわたしたちが自分の罪を告白し、キリストを命の与え主として受け入れるなら、……わたしたちはキリストと一つになり、わたしたちの意志は神のご意志と調和するようになる。永遠に続くキリストの命にあずかる者となるのである。わたしたちはキリストの命を受けることによって、神から不死を得る。なぜなら、キリストにこそ、満ち満ちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っているからである。この命は神性と人性の神秘的な結合であり、協力である。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 6 月 17 日)

キリストは、われわれがキリストと一つ精神になるために、われわれと一つ肉体になられた。われわれが墓から出てくるのは、この結合によるのである。すなわちキリストの力のあらわれとしてだけでなく、信仰によってキリストのいのちがわれわれのものとなったからである。キリストの真の品性を見、キリストを心に受け入れる者は、永遠のいのちを持つ。キリストがわれわれのうちに住まれるのは、みたまを通してであり、神のみたまが信仰によって心に受け入れられるときに、それは永遠のいのちの始まりである。(各時代の希望中巻 135, 136)

わたしたちは互いにわかる

「その時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。」(コリント第一 13:12)

弟子たちがイエスを知っていたように、われわれは友人たちがわかるのである。彼らは、この世では不具だったり、病気だったり、みにくかったりしたかもしれないが、完全な健康と均整のとれた肉体をもってよみがえる。しかし、その栄化されたからだにあっても、彼らの個性は完全に保存される。……われわれはイエスのお顔から輝き出る光によって輝く、愛する者たちの顔かたちをみとめるのである。(各時代の希望下巻 341)

贖われた者たちは、自分たちが、上げられた救い主へと注意をむけさせた人々と会うと、その人たちがわかる。彼らはこの魂と、何という祝福された交わりを持つことであろうか。「わたしは世で神も希望もない罪人だった。そしてあなたがやってきて、わたしの唯一の希望として、尊い救い主に、わたしの注意を引いてくれた……」という声が聞こえる。また「わたしは異教の地にいる異邦人であった。あなたは、友や気持ちの良い家庭を離れ、イエスを唯一の正しい神として、どのように見出し、信じるのかを教えるために、わたしの所に来てくれた。わたしは自分の偶像を壊し、神を礼拝した。そして今わたしは主に顔と顔を合わせてお目にかかっている。わたしは救われた、わたしの愛する主をいつまでも眺めるために、永遠に救われたのだ……」と別の者が言う。

他の者は飢えた者に食べさせ、裸な者に着せた人々に感謝を表す。「絶望がわたしの魂を不信にしばりつけていた時に、希望と慰めの言葉を語るようにと、主があなたをわたしのところへ送ってくれた。あなたはわたしの身体上の必要を満たすために食物を持参し、神のみ言葉を開いて、わたしの霊的必要を悟らせてくれた。あなたはわたしを兄弟として扱ってくれた。あなたはわたしの悲しみに同情し、打たれ傷ついた魂をいやしてくれた。だから、わたしを救うために差し伸べられたキリストのみ手を、わたしはつかむことができた。わたしが何も知らないときに、わたしを心にかけて下さる神が天におられることを忍耐強く教えてくれた。神のみ言葉から、尊いみ約束を読んでくれた。神がわたしを救ってくださるという信仰を、あなたはわたしに注ぎ込んでくれた。キリストがわたしのためになしてくださった犠牲を瞑想したとき、わたしの心は和らげられ、制せられ、砕かれた。……わたしは救われて、永遠に救われて、わたしのためにご自身の命を与えてくださったお方を讃美し、そのみ前に永遠に生きるために、ここにいる」と彼らは言う。

これらの贖われた人々が会い、自分のために重荷を負った人々に挨拶をする時、そこには何という喜びがあることであろうか。自分自身を喜ばせるためではなく、ほとんど祝福にあずかっていない不幸な人々にとって祝福となるために生きてきた人々の心は最高の満ち足りるのである。(この日のわたしの生涯 353)

祝福にみちた望み

「祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。」(テトス 2:13)

イエスは、ご自分がおられる所にわたしたちもおらせるため、わたしたちのために住まいを用意しに行くと仰せになった。わたしたちは永遠に主と共に住み、そのこうごうしいみ顔の光を楽しむのである。嬉しい期待にわたしの心は喜びで高鳴る。わたしたちは家郷のすぐそばまで来ている。天、素晴らしい天国。そこはわたしたちの永遠の家郷である。わたしはイエスが生きておられる一瞬一瞬が嬉しい。なぜならイエスは、わたしたちもまた生きるようにと生きておられるからである。「主をほめたたえよ」とわたしの魂は言う。イエスのうちに豊かさがあり、一人一人のため、すべての者のために備えがある。それだからどうしてわたしたちは異教の地でパンや飢えのために死んでよかろうか。

神のみ旨に完全に調和した救いに、わたしは飢え渇いている。わたしたちにはイエスを通して申し分のない希望がある。この希望は確かであって、ゆるぎなく、幕の内に入り行かせるものである。わたしたちが苦しんでいる時に慰めを与え、激しい苦悩のただ中で喜びを与え、周囲にある悲しみを追い払って、希望を通して不死と永遠を見るように仕向ける。……わたしたちは地上の宝には魅かれない。なぜなら、過ぎ行く地上の宝のはるか上に達する希望、無限の嗣業を手にする希望がわたしたちにはあり、永遠に続く、朽ちない、汚れのない、そして消え去らない宝があるからである。……

わたしたちの有限な体は死んで、墓に横たわるであろう。しかし、祝福に満ちた望みは、イエスのみ声が、眠っている聖徒を呼び出す復活の時まで生き続ける。わたしたちはその時、祝福に満ちた、輝かしい望みが成就したことを喜ぶのである。わたしたちは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。豊かな、輝かしい報いがわたしたちの前にある。それは走ることに対する賞である。そしてもし勇気をもって、たゆまず続けるなら、確かにこの賞は手に入るのである。……

わたしたちのために救いがある。それならばなぜわたしたちは泉から離れたりするのだろうか。魂が新たにされ、活気づけられ、神にあって繁茂することができるよう、泉に来て飲もうではないか。この事について語り、思う事は、地上のことを思うことよりもわたしたちにとって良いことである。ああ、イエスの麗しい、しみのない品性のことを深く瞑想しよう。また、ながめることによってわたしたちは同じ姿に変えられるのである。勇気を出しなさい。神を信じなさい。(天国で 352)

義人の昇天

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」(テサロニケ第一 4:16, 17)

まもなく大きな白い雲が現れた。それはこれまでのどんなものよりも美しく見えた。その上に人の子が座っておられた。最初、われわれには、雲の上におられるイエスが見えなかったが、雲がだんだん地上に近づくにつれて、彼の麗しい姿を見ることができた。……神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こし、輝かしい不死の衣を彼らに与えた。生きている聖徒たちは、一瞬の間に変えられ、彼らとともに雲の車の中へと引き上げられた。雲の車がのぼって行くのは、実に輝かしい光景であった。車の両側に翼があり、その下の方には輪があった。車が回りながらのぼって行くとき、輪は「聖なるかな」と叫び、翼は動きながら「聖なるかな」と叫び、雲のまわりに付きそう聖天使たちも、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神！」と叫んだ。そして、雲の中の聖徒たちは、「栄光あれ、ハレルヤ！」と叫んだ。(初代文集 95)

われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼっていって、ガラスの海に着いた。そのとき、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。彼は、われわれに黄金の立琴と勝利のしゅろの枝をお与えになった。十四万四千の人々は、このガラスの海の上に、真四角に並んだ。星が重そうについた冠もあればわずかしかついていないのもあった。すべての者は、自分たちの冠に心から満足していた。そして、彼らはみな、肩から足までとどく輝く白い衣を着ていた。ガラスの海の上を都の門に向かって進むわれわれを天使たちが、取り巻いていた。イエスは、力強い栄光のみ手をあげて、光り輝くちょうつがいのついた真珠の門を押し開き、「あなたがたは、わたしの血によって、あなたがたの衣を洗い、わたしの真理のために堅くたった。中に入りなさい」とわれわれに言われた。われわれはみな進み入り、都に入る完全な権利が自分たちにあるのだと感じた。(同上 66)

有限な、人間の耳に聞こえたどの調べよりも麗しい声が「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と仰せになるのが聞こえる。(クリスチャンの奉仕 350)

住民の絶えた地上

「わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。 わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。 わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。」(エレミヤ 4:23-25)

キリストがこられる時、悪人は、全地の表面から一掃される。すなわち、主イエスの口の息によって殺され、来臨の輝きによって滅ぼされる。キリストはご自分の民を神の都へ連れて行かれ、地には住民がいなくなる。「見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。」「地は全くむなしくされ、全くかすめられる。主がこの言葉を告げられたからである。」「これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれ」る(イザヤ 24:1, 3, 5, 6)。

全地は荒涼たる荒野のように見える。地震によって破壊された都市や村落の廃墟、根こそぎにされた木々、海から投げ出されたり、地中から引き裂かれたごつごつした岩石が、地の表面にちらばっている。一方、広いほら穴は、山々がその基から裂けてしまった跡を示している。

ここで、贖罪の日の最後の厳粛な務めに予表されていた事件が起こる。至聖所における務めが完了して、イスラエルの罪が、罪祭の血によって聖所から除かれたときに、アザゼルの山羊が生きたまま主の前に連れて来られた。そして、大祭司は、会衆の前で、「イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白し」た(レビ記 16:21)。それと同様に、天の聖所における贖罪の働きが完了したときに、神と天使たちと贖われた人々の群れとの前で、神の民の罪が、サタンの上におかれるのである。彼が神の民に犯させたすべての罪悪の責任が、彼にあることが宣言される。(各時代の大争闘下巻 440, 441)

サタンは捕らえられる

「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。 彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、」(黙示録 20:1, 2)

黙示録の記者は、サタンが追放されることと、地が混乱した荒廃状態になることを預言し、この状態が一千年続くことを宣言している。主の再臨の光景と悪人の滅亡について述べたあとで、預言には、続いてこう言われている。「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入り口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた」(黙示録 20:1-3)。

「底知れぬ所」という言葉が、混乱と暗黒の状態にある地球を象徴していることは、ほかの聖句によって明らかである。地球の「はじめ」の状態について、聖書には、「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり」と言われている (創世記一ノ二〔ここで「淵」と訳されている言葉は、黙示録 20:1-3 で「底知れぬ所」と訳されている言葉と同じである〕)。預言には、地が、少なくとも部分的に、この状態にもどるということが教えられている。預言者エレミヤは、神の大いなる日を待ち望んでこう宣言している。「わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた」(エレミヤ書 4:23-26)。

ここが、サタンと悪天使たちが、千年の間住むところとなる。サタンは、地球に制限されているから、他世界に近づいて、決して堕落したことのない者たちを試み悩ますことはできない。こういう意味で、サタンはつながれるのである。彼が働きかけることのできる者が、だれもいなくなってしまうのである。幾世紀にもわたって彼のただ一つの楽しみであった欺瞞と破壊の行為が、全くできなくなるのである。(各時代の大争闘下巻 441, 442)

家族は再び一緒になる

「主はこう仰せられる、『あなたは泣く声をとどめ、目から涙をながすことをやめよ。あなたのわざに報いがある。彼らは敵の地から帰ってくると主は言われる。 あなたの将来には希望があり、あなたの子供たちは自分の国に帰ってくると主は言われる。』」(エレミヤ 31:16, 17)

キリストは雲に乗って大いなる栄光のうちにこられる。多くの輝く天使たちがキリストにつき従う。主は、死人をよみがえらせ、生ける聖徒たちを栄光から栄光へ変えるためにこられる。主を愛し、その戒めを守った者たちに栄光を与え、彼らをみもとに連れて行くために、主はおいでになる。主は、彼らを、またご自分の約束をお忘れにならなかった。家族はふたたびいっしょになる。(各時代の希望下巻 98)

神の日には、信心深い母親にどれだけのものを負っているかが明らかとなる。……審判を行う者はその席に着き、数々の巻物が開かれた。偉大な審判者の「よくやった」というみ声が聞こえ、不死の栄光という冠が勝利者の額に被せられる。多くの者は、集まった宇宙の人々の見ている中で、自分たちの冠を高く掲げて、自分たちの母親を指して、「母は神の恵みを通して、わたしを今ある者にしてくれた。母の祈りと教えがわたしの永遠の救いに至る祝福となった」と言う。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1910 年 10 月 11 日)

口に言い表せない喜びに包まれて、両親は子供たちに冠と衣とハープが与えられるのを見た。希望と恐れの日々は終わった。涙と祈りをもって播いた種はむだになったように思えたが、ついには喜びの声をもって刈り取られる。彼らの子供たちは贖われたのである。(同上 1886 年 7 月 1 日)

ああ、なんというすばらしい贖いであろう。これこそ長い間、語り、熱望し、熱心な期待をもって瞑想してきたが、しかし決して十分には理解できなかったことであった。(各時代の大争闘下巻 424)

キリストに忠実に従った人びとにとって、キリストは日ごとの伴侶、親しい友であった。彼らは、神との密接な接触、絶えざる交わりを保ってきた。彼らの上に、主の栄光がのぼった。イエス・キリストのみ顔にあらわれた神の栄光の知識の光が、彼らの中に反映したのである。今彼らは、荘厳な王の大いなる輝きと栄光に浴して喜ぶのである。彼らは、心に天を持っているから、天との交わりに入る準備ができているのである。(キリストの実物教訓 397)

忠実な者のために準備された冠

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。 今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。(テモテ第二4:7,8)

主がご自分の宝石を集められるとき、真実な者、率直な者、正直な者たちを、喜びを持って眺められる。天使たちはこの人々のための冠を作るのに携わった。そして、星で飾った冠は輝いて、神の御座から流れ出る光を反射する。(教会への証5巻96)

天のことを話しなさい。イエスのことを、麗しさと栄光と、あなたに対する主の永遠の愛を語りなさい。そして、あなたを救うために死なれたお方に対する愛と感謝の念を心からあふれ出させなさい。ああ、平和のうちに、あなたの主に会う備えをしなさい。備えをする人はまもなく朽ちることのない、命の冠を受け、キリストと共に、天使やキリストの尊い血で贖われた人々と共に、神の王国で永遠に住むのである。(神のむすこ娘たち362)

栄光の冠は……救い主の来臨を待ち、愛し、切望するわたしたちのために保管されている。

栄光と名誉と不死の冠を被せられるのは、待ち望んでいる人々である。あなた方は世の名誉や地の偉い人々の称賛について……話す必要ない。それらはみなむなしいものである。神の指がそれらにふれただけで、すぐに再びちりに戻るのである。わたしは永続するほまれ、不死であり、決して滅びることのないほまれを望んでいる。それは君主のひたいを飾る、どの冠よりも素晴らしい冠である。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1869年8月17)

その日には、贖われた者はみ父と御子の栄光で輝くであろう。天の使いたちは金の立琴をかなでながら王とその勝利の栄冠である人々、すなわち、小羊の血で洗われ、白くされた人々を歓迎する。勝利の歌が全天を満たして響き渡る。キリストは勝利された。主はご自分が贖われた人々、すなわち、ご自分の苦しみと自己犠牲の伝道がむだにならなかった証人を伴って、天の宮廷に入られる。(神のむすこ娘たち362)

神のすべての子らのために冠がある

「試錬を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。」(ヤコブ 1:12)

その時わたしは、天使の大群が、都から、輝く冠を持って来るのを見た。それは聖徒たちのひとりびとりに与えられる冠で、各人の名前が書き込まれていた。イエスが冠をもとめられると、天使たちはそれをイエスのみ前にささげた。イエスは冠を右手で受け取られると、それを聖徒の頭にやさしく置かれた。同じように、天使たちが立琴を持ってきた。イエスはそれもまた聖徒たちに与えられた。天使の中の指揮者たちが、まず最初の調べを奏した。するとみんなが声をあげて感謝と喜びの歌をうたい、その手はたくみに立琴の糸をあやつり、そのメロディーは豊かな、完全な調べとなって流れた。……

都の中には目を楽しませるあらゆるものがあった。彼らは至るところに豊かな栄光を見た。それからイエスは、贖われた聖徒たちをごらんになった。彼らの顔色は栄光に輝いていた。イエスは、彼らの上にじっとやさしい目をそそいで、豊かな美しい声でこう仰せになった、「わたしは、自分の魂の辛苦を見ることができて満足だ。この豊かな栄光は永久にあなた方のものだ。あなた方の不幸は終わった。もはや死もなく悲しみも嘆きもなく、また苦しみもないのだ」と。……

それからわたしは、イエスが民を生命の木に連れて行かれるのを見た。……生命の木には大そう美しい実がなっていた。聖徒たちはそれを自由に食べることができた。都の中には荘厳なみ座があって、そこから水晶のように透き通った生命の水の川が流れ出ていた。生命の木はこの川の両側にまたがっていた。川岸には、その他にも美しい木々があって、食べるのによい果実をつけていた。

ことばというものはあまりに貧弱で、天国の光景を描写することができない。天国の光景がわたしの前に現れるにつれて、わたしはただ驚嘆するよりほかはない。そのすぐれた壮麗さと、そのすばらしい栄光に心を奪われたわたしは、筆を投げて叫んだ。「ああ、なんという愛！なんという驚くべき愛だろうか」と。どんなことばでほめたたえてみても、天の栄光と比類のない救い主の愛の深さを描写することはできない。(生き残る人々 465, 466)

わたしたちの救いが近づいている

「『これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから』。」(ルカ 21:28)

キリストの来臨はわたしたちが初め信じた時よりも近づいている。大争闘はほとんど終わろうとしている。神の審判は地に下ろうとしている。「だから、あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子が来るからである」と言う、厳粛な警告を彼らはする (マタイ 24:44)。……

わたしたちは地上歴史の閉じようとする場面に生きている。預言はすみやかに成就している。猶予の時間はすみやかに過ぎようとしている。わたしたちにはむだにする時間は一瞬たりともない。用心して眠っているのを見つけられないようにしよう。だれも心のうちや行動で、「わたしの主人は帰りがおそい」と言わないようにしよう。キリストがまもなく帰ってこられるというメッセージを熱心な警告の言葉で響かせよう。あらゆるところで、男女に、悔い改めて、来るべき災いから逃れるようにと説き勧めよう。……

主はまもなく来られるので、わたしたちは平和のうちに主にお会いするため、備えをしなければならない。周囲の人々に光を分け与えるために、自分の内にある力をすべて用いるように決心しよう。わたしたちは悲しむべきではなく、喜んで、主イエスを常に自分の前に掲げていなければならない。主はまもなく来られる。だからわたしたちはその来臨を待ち望み、用意をしていなければならないのである。ああ、主にお目にかかり、贖われた者として歓迎されるとは、なんという光栄であろうか。わたしたちは長い間待った。しかしわたしたちの希望は衰えてはならない。もしもわたしたちが麗しい王にお目にかかることさえできるなら、永遠に祝福されるのである。わたしは大声で「家路をさして行こう!」と、叫ばなければならないような気がする。キリストが贖われた者たちを家郷に連れて行くために、力と大いなる栄光のうちに来られるその時に、わたしたちは近づいている。……

わたしたちは長い間、救い主が帰ってこられるのを待っていた。しかし、それでもなお、み約束は確かである。まもなくわたしたちは約束された家に住む。そこではイエスが、神の御座から流れている命の川のほとりにわたしたちを連れて行ってくださる。そして、わたしたちの品性を完全なものにするために、この世で、わたしたちにもたらされた摂理、隠されていたみ摂理を説明される。そこでわたしたちは回復されたエデンの美しさを、はっきりとした目で見る。御自ら、わたしたちの頭に被せてくださった冠を、贖い主の足元に投げ出して、金の立琴をかなでながら、わたしたちは御座に座っておられるお方に対する讃美を全天に満たすのである。(教会への証 8 巻 252-254)

その報いは主と共にある

「『見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう』。」(黙示録 22:12)

地上におけるわたしたちの働きは、まもなく終わる。そしてすべての人は自分の働きに応じた報いを受ける。わたしは聖徒らの報いである不死という嗣業を示された。また真理のためにもっとも耐え忍んだ人々が、自分たちに大変な時があったとは考えず、天国はなんと安価なのだろうと思っているのをわたしは見た。(教会への証 1 巻 381)

毎日、果たされなかった義務、おろそかにされ、利己的であったこと、ごまかし、偽り、行き過ぎなどの記録という重荷がもたらされる。なんと多くの悪い行いが、最後の審判のために積み上げられていることだろう。キリストが来られる時、すべての人に対して、その人のなしたわざに応じて与えるようにと、「その報いは主と共にあり、その働きの報いは、そのみ前にある」のである。その時なんという啓示がなされることであろうか。自分の生活行動が歴史のページに明らかにされる時、ある人々になんという困惑の表情が浮かぶことであろうか。(同上 2 巻 160)

あらゆる善行、また悪い行い、そして、それによる他の人々への感化が、すべての秘密をあらわにされるお方、心を探られるお方によって明らかにされる。そして、その報いは、その行動を起こした動機によるのである。(同上 520)

キリストの来臨は近く、非常に速くなっている。働く時は短く、男女は滅んでいる。……

わたしたちには、自分をしっかりとささえるために、神の改変する力が必要である。それによってわたしたちは滅び行く世界の必要を理解することができる。あなたがたに対するわたしのメッセージという重荷は、準備しなさい。主にお会いする準備をしなさいであり、あなたの灯りを整え、真理の光を小道や垣根のあたりに輝かせなさいとういうことである。万物の終わりが近づいているという警告を受けねばならない世界がある。……

新しい信仰の目覚めを求めよう。わたしたちは神の聖霊の御臨在が必要である。それによって、わたしたちの心は和らげられ、働きに荒々しい精神を持ち込まないようにできる。聖霊がわたしたちの心を完全に占めてくださるようにとわたしは祈る。わたしたちは、神を助言者と見なし、どこであろうと与えられ神のご計画を果たす準備のできている、神の子として行動しよう。神はそのような人々によって栄光を受けられる。そしてわたしたちの熱心さを証する人々はアーメン、アーメンと言う。(同上 9 巻 105-108)

研究 28

三重のメッセージ

もうひとりの御使のメッセージ Part 7

もう一人の御使と大いなる叫び

「第三天使のメッセージは地をめぐり、民を目覚めさせ、そして彼らの注意を神の戒めとイエスの信仰へと向けさせなければならない。もう一人の御使は第三天使とその声をあわせる。そして、地はその栄光によって明るくされるのである。光は増し加わり、そしてそれは地のすべての国民に輝き出る。それは燃える光として発せられる。それには大いなる力が伴い、ついには黄金の光線が地のおもてに住むすべての国語、すべての民族、すべての国民に下るのである。あなたにお尋ねしたいのは、あなたはこの働きのために準備をしているだろうか、ということである。あなたは永遠のために築いているであろうか。あなたはこの御使が世に伝えるべきこのメッセージをもっている民を表していることを覚えていなければならない。あなたはこの民の中にいるであろうか。あなたは本当にわたしたちの携わっているこの働きが、第三天使のメッセージであると信じているであろうか。もしそうであれば、わたしたちになすべき大きな働きがあること、またわたしたちがそれに取り掛からねばならないことがあなたにわかる。わたしたちは、自分自身を神とその働きとの正しい関係におき、真理への厳密な服従によって自らを聖別しなければならない。……ここに二種類の人々がいる。一つは燃やされるために束ねられている人々であり、もう一つは真理と愛のひもによって束ねられている人々である。サタンは自分に従う者たちを悪のわざをもって束ねており、キリストはご自分の民を、ご自分の戒めを守ることにある愛と信仰のうちに一つに束ねておられるのである。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1885 年 8 月 18 日)

「第三天使のメッセージが力強く伝えられなければならない。第一、第二天使のメッセージの宣布の力は、第三天使に集結されるのである。啓示の中でヨハネは、第三天使に結合する天来の使命者について次のように述べた。『この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った』(黙示録一八ノ一、二)。わたしたちは第三天使のメッセージをあまりにもあいまいなやり方で伝え、人々に印象を残さない危険性がある。あまりに多くの他の関心事が持ち込まれるために、まさに力強く宣布されるべきメッセージが弱められ、声が出なくなる。……安息日の問題は触れられてはきたが、この時代の大いなる試金石として提示されてはこなかった。……主はわたしたちに命じておられる。『大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ』(イザヤ五八ノ一)。ラッパははっきりとした音を出さなければならない。あなたが二週間しか会衆一同の前に立つことができないのであれば、安息日問題のために道を備えようと思って、その他一切を提示するまで安息日問題を提示せずにひき延ばしてはならない。旗印―神の戒めとイエスの信仰―を掲げなさい。……

何一つこの時代のための真理の力を弱めることがないようにしよう。現代の真理がわたしたちの重荷となるべきである。第三天使のメッセージは、永遠の真理の土台の上に自分の立場をとる人々を諸教会から分離させるというその働きをなさなければならない。

わたしたちのメッセージは生死にかかわるメッセージである。そしてわたしたちはそれをありのまま、すなわち偉大な神の力として表さなければならない。わたしたちはそれをそのはっきりとした力の一切をかけて提示しなければならない。そのとき主はそれを効果あるものとしてくださる。大きなこと、すなわち神の御霊の表れをさえ期待するのは、わたしたちの特権である。これが魂に罪を自覚させ、改心させる力である。」(教会への証 6 巻 60 ～ 62)

第三天使のメッセージとは何か

「第三天使の旗印には、次のように記されている、『神の戒めとイエスの信仰』。」(ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 2 巻 384)

「イエスは、聖所における奉仕を終わり、至聖所にはいって、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する第三のメッセージをたずさえたもうひとりの力強い天使を、お送りになった。天使の手には、羊皮紙が渡された。そして、彼は、力と威光とをもって地に下り、これまで人類に伝えられたことのない、恐怖すべき威嚇をもった恐るべき警告を発した。このメッセージは、神の民の前にある試みと苦悩の時を彼らに示して、彼らに用心させるためのものであった。「彼らは、獣とその像と激しく戦わなければならない。彼らが永遠の生命を得る唯一の希望は、堅く立つことである。彼らは、その生命が危機にひんしても、真理に固く立たなければならない」と天使は言った。第三の天使は、『ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。」(初代文集 414、415)

「真の安息日が筆舌をつくして民の前に提示されなければならないのは、この時である。十誡の第四条とそれを遵守する人々が無視されさげすまれるとき、忠実な少数の者たちはそれが自分たちの顔を隠すべき時なのではなく、『神の戒めとイエスの信仰を守る』(黙示録 14:12 英語訳) という第三天使のメッセージが記されている旗印を広げることによって、エホバの律法を高めるべき時なのだということを知っている。」(伝道 281)

「1844 年以来、第三天使のメッセージの預言の成就として、世の人々の注意は真の安息日に向けられるようになり、神の聖日を守る人々の数はたえず増加している。」(生き残る人々 432)

「これまで数名の人々がわたしに手紙をよこし、信仰による義認のメッセージは第三天使のメッセージかどうかをたずねてきた。そしてわたしは『それこそ、まさに第三天使のメッセージそのものです』と答えてきた。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 4 月 1 日)

「『イエスの信仰』。それについて語られてはいるが、理解されていない。何が第三天使のメッセージのイエスの信仰を構成しているのであろうか。イエスはわたしたちの罪を許す救い主となられるために、わたしたちの罪を負われるお方となった。このお方はわたしたちが受けるべき取り扱いを受けられた。このお方はわ

たしたちがご自分の義を受けることができるように、わたしたちの世に来られて、わたしたちの罪を引き受けられた。そしてわたしたちを救うキリストの能力を、十分に、完全に、全面的に信じる信仰が、イエスの信仰なのである。」（ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 3 巻 172）

第三天使の働き

「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った。」（黙示録 7:2）

「わたしは、神の戒めとイエスの信仰を宣布している第三天使が〔黙示録 14:9～12 参照〕、このメッセージを受けて、世に対して神の戒めとこのお方の律法を目のひとみのように守れと警告の声をあげる民を表していること、またこの警告に応えて、多くの人々が主の安息日を信奉するようになることを示された。」（クリスチャン経験と E・G・ﾎﾜｲﾄの教え 87）

「次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。『彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならない』。（初代文集 221）

なぜ、もう一人の御使が来なければならなかったのか

「わたしたちは第三天使のメッセージをあまりにもあいまいなやり方で伝え、民に印象を残さない危険性がある。あまりに多くの他の関心事が持ち込まれるために、まさに力強く宣布されるべきメッセージが弱められ、声が出なくなる。」（教会への証 6 巻 60）

「かつては第三天使のメッセージを熱心に宣布した多くの人々が今や無気力で無関心になっているというのは、厳粛にしておそるべき真実である。世俗と多くの自称クリスチャンの間を区別する境界線はほとんど見分けがつかなくなっている。かつては熱心な再臨信徒であった人々は、世に―その習慣と慣習と利己心に―一致しつつある。世を神の律法への服従を捧げるように導く代わりに、教会はま

すます不法において世と密接に結合しつつある。日ごとに教会は世に改心しつつあるのである。」(教会への証八巻 118, 119)

「多くの人々はイエスを見失ってしまった。彼らは自分たちの目をこのお方の神性とこのお方の功績とそしてこのお方の人類家族に対する不変の愛に向ける必要があった。」(牧師への証 92)

もう一人の御使はその働きを始めた

「しかし、あなたがたに言っておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼をあしらった。」(マタイ 17:12)

「その大いなるあわれみによって、主はワゴナー長老とジョーンズ長老を通して、〔1888 年〕ご自分の民に最も尊いメッセージを送られた。このメッセージは上げられた救い主、すなわち全世界の罪のための犠牲を世の前にもっとはっきりと示すものであった。それは保証人を信じる信仰を通しての義認を提示し、神のすべての戒めへの服従のうちに表されたキリストの義を受け入れるようにと民を招いた。……これは神が世に伝えられるべきことをお命じになったメッセージである。それは第三天使のメッセージであり、大いなる声で宣布され、大規模な聖霊の注ぎの伴うべきメッセージである。」(牧師への証 91, 92)

「テストの時がわたしたちに間近に迫っている。なぜなら第三天使の大いなる叫びはすでに、罪を許される贖い主、キリストの義の啓示のうちに始まっているからである。これはその栄光が全地を満たす御使の光の始まりである。なぜならイエスを掲げ、型に表されたとおりに、象徴に影が示されたとおりに、預言者たちの啓示に表されたとおりに、このお方の弟子たちに与えられた教訓や人の子らのためになされた奇跡のうちに明らかにされたとおりにこのお方を世に提示することが、警告のメッセージが伝えられたすべての人の働きだからである。……

もしあなたが悩みの時を耐え忍びたいならば、あなたはキリストを知らなければならない。そしてこのお方が悔い改める罪人に着せてくださる義の賜物を自分のものとしなければならない。」(ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 1 巻 363)

もう一人の御使の最後の働き

「ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある。」(黙示録 14:12)

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。」(黙示録 18:4)

「わたしは、天使たちが地上へくだったり、天へのぼったりして、天をあちらこちらかけめぐり、ある重要な事件の成就のために準備しているのを見た。それからまた、もうひとりの力の強い天使が、地上へくだって第三天使と声をあわせ、そのメッセージに力と勢いを与えるように、任務を受けているのが見られた。この天使には大いなる力と栄光がさずけられた。……この天使の働きは、最後の大いなる働きにおいて第三天使のメッセージが大いなる叫びとなってもりあがるちょうどその時に始められる。神の民はこのようにして、まもなく会わねばならない誘惑の時に立つ準備ができるのである。わたしは、彼らの上に大いなる光がとどまり、彼らが恐れる色なく、第三天使のメッセージの宣布に協力しているのを見た。大いなる力をもったこの天使をたすけるために、天から天使たちがつかわされた。そして『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。……』と叫んでいる声が、いたるところにきかれた。1844 年に第二天使のメッセージに夜中の叫びが合流したように、このメッセージは、第三天使のメッセージに追加されて一緒になったもののようであった。」(初代文集 448, 449)

「全地は神の真理の栄光によって明るくされなければならない。……ラッパは確かな音を出さなければならない。神の律法が大いなるものとされ、律法の要求がその本来の聖なる性質のうちに提示されなければならない。それは人々が真理の側か反対の側かを決定するようになるためである。しかし、この働きは義のうちに短縮されることになる。キリストの義のメッセージは世界の果てから果てまで鳴り響かなければならない。これが第三天使の働きを終結させる神の栄光である。」(世界総会冊子 1893 年 1 月 28 日)

「わたしは、神が名目的再臨信徒たちと堕落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害がくだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタン

は、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、堕落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである。」（初代文集 424, 425）

わたしたちの出版物を通して

「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」（伝道の書 11:1）

「そして大いなる力をもって天から下り、地をその栄光で明るくするもう一人の御使の働きの大部分は、わたしたちの出版所を通して成し遂げられるのである。」（教会への証 7 巻 139, 140）

わたしたちの今の必要

「彼らは、……小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。」（黙示録 14:4）

「大いなる改革の運動は、父親と母親と子供たちに神の律法の原則を提示することによって始められなければならない。」（教会への証 6 巻 119）

「どのような代価を払うことになっても、すべての点に達し、すべてのテストにたえ、克服する人々は、真の証人の勧告に注意を払ってきた。そして彼らは後の雨を受けて、それによって昇天にふさわしい者とされるのである。」（教会への証 1 巻 187）

「わたしたちには最も大きな規模と最も高い重要性をもった働きがあることをおぼえ、わたしたちは自分たちの狭くて利己的な計画を捨てるべきである。この働きをするとき、わたしたちは第一、第二、第三天使のメッセージを鳴り響かせ、そしてこうすることによって地をその栄光で明るくするもう一人の御使が天から来るための準備をしているのである。」（教会への証 6 巻 406）

「光が地を明るくするために発せられるとき、彼らは主のところに助けに来る代わりに、このお方の働きを自分たちの狭い考えに合わせようとしばりつけたがることであろう。わたしは、主がこの最後の働きをなさる際に、物事の当たり前の順

序とはまったくかけはなれた方法で、そしてどんな人間の計画とも正反対な方法でなされると申し上げる。わたしたちの間にはいつも神のみ働きを支配したがる人々がいる。彼らは世に伝えられるべきメッセージにおいて第三天使に加わる御使の指揮の下に働きが前進するときに、どのような運動がなされるかさえも決めたがるのである。神は神ご自身のみ手が手綱をとっておられることが認められるような方法と手段をお用いになる。働き人たちは、神の義の働きを実行し完成するために、このお方がお用いになる単純な方法によって驚かされることになる。」(牧師への証 300)

最も重要な質問

「モーセは宿営の門に立って言った、『すべて主につく者はわたしのもとにきなさい』。レビの子たちはみな彼のもとに集まった。」(出エジプト記 32:26)

「命にかかわるこの時代のための最も重要な質問とは、『だれが主の側につくだろうか。だれが世に真理のメッセージを伝える御使に結合するだろうか。だれが全地をその栄光で満たす光を受けるであろうか』である。自分たちのもっている光を大事にする人々は、さらに多くの光を受ける。和らげ従わせるキリストの恵みに屈服する魂の周りを、ますます光が照らすようになる。そして光を愛する人々は、サタンの惑わしから救われるのである。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1889 年 11 月 5 日)

（52 ページの続き）

がなかったのです。自分と同じ種別（しゅべつ：同じサル）で世話をしてくれるものがなかったのです。ただ、像があったばかりでした。……

わたしたちは像に世話をされるのではないことを、わたしたちの創造主(そうぞうぬし）に感謝（かんしゃ）することができます！主は家族の輪（わ）が安全な場所となり、ここちよい一つの群れとなるように計画されました。それは赤ちゃんをゆりかごで育て、子どもたちを導き、大人たちを強め、そして高齢者をやさしく世話する場所です。

神さまのご計画の中で、家族とは何でしょうか？聖書の中で、創造主はそれがご自分によって指示された結婚、つまり一人の男性と一人の女性が死ぬまで共にいるつながり、そこから始まることを示しています。それから、もし夫と妻が親になれば、自分の子どもたちを永遠のために導き、準備させるための神様のとうとい賜物（たまもの：おくりもの）として感謝するのです。

悲しいことにこの世では魂の敵が、ちょうど科学者が赤ちゃんザルにしたような残酷な実験を人類家族にためしてきました。サタンは神さまが計画されたものとは違うあらゆる種類のおかしな考えをもちこんできました。そして多くの人々がそのために苦しんでいます。

ですから、この問題に関する答えは何でしょうか？わたしたちは家族のための神様のみ旨（むね：お考え）とこのお方の方法を学ぶために、神様の言葉と証（あかし）の書にもどる必要があります。主はわたしたちを愛しておられます。地上のどんな人が愛することができるよりももっとわたしたちを愛しておられます。このお方こそわたしたちを保護（ほご）し育てるご計画を与えて下さるお方です。わたしたちが家族の輪のために、このお方のみ言葉に従うとき、もっともっと幸せになることができます！

油揚げの詰め焼き

〔材料〕

- 油揚げ（半分に切り開く）　5 枚（10 枚になります）
  ※寿司揚げが便利です
- グルテンバーガー　小缶 1（約 200 グラム）
- パセリの葉　20 グラム
- にんにく（スライス）　1 片
- カレー粉　小さじ 1
- 粉末昆布だし　少々
- 塩　少々

〔作り方〕

1. パセリを粗く切ります。
2. にんにくをオリーブ油で炒めます。
3. グルテンバーガー、パセリ、カレー粉、粉末昆布だし、塩を混ぜます。
4. 油揚げに 3 を詰めて、つまようじでとめます。
5. フライパンにオリーブ油をうすく敷き、両面を焼きます。
6. つまようじを外し、三角に切って盛りつけます。

※グルテンバーガーが手に入らない場合は、カレー味の炒り豆腐で代用できます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

真の生きた家族

「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労（きんろう）の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう。あなたの妻は家の奥にいて多くの実を結ぶぶどうの木のようであり、あなたの子供たちは食卓を囲んでオリブの若木のようである。」（詩篇 128:1-3）

みなさんは、家族がひとりもいない悲しさを想像できますか？

ある科学者がかつて、サルの赤ちゃんを母親からひき離したことがあります。お母さんの代わりに、彼はにせもののお母さんザルをワイヤーで作りました。このワイヤーの像（ぞう）をやわらかい布でおおい、あるものはぬくもりをだすために暖（あたた）めさえしました。そしてすべてのサルに彼は赤ちゃんに飲ませるための小さなほにゅうびんまでつけました。しかし、赤ちゃんザルはとても動揺（どうよう）して、とてもおかしな行動をとりました。またあるものはさびしさのあまり、死んでしまったのです。人々はもちろんこれが人間の赤ちゃんではなくてほっとしましたが、もちろん、みなこの科学者がしたことは残酷（ざんこく）なことだと思いました。なぜなら、この実験（じっけん）は、神さまの被造物（ひぞうぶつ：造られたもの）に対して行うのにのぞましい実験ではなかったからです。

何が足りなかったのでしょうか。ほとんどの赤ちゃんザルは食べ物もぬくもりもありました。しかし、彼らには、愛と養育（よういく：そだてること）

（49 ページに続く）